経済厚生委員会行政視察報告書

令和５年９月２６日

境港市議会
議長　荒井　秀行　様

経済厚生委員会
委員長　岡空　研二

下記のとおり行政視察（調査・研修）を行ったので、その結果を報告します。

記

１　視察等期間	令和５年８月２４日（木）～令和５年８月２６日（土）
２　視察等先及び内容	１.令和５年８月２４日（木）　午後３時００分～４時３０分 〇東京都杉並区今川２丁目１４番１２号 社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会 杉並育成園　すだちの里すぎなみ 移行型の入所施設（通過型支援施設からグループホームなどへ移行）について視察 ２.令和５年８月２５日（金）　午前１０時～１１時３０分 〇東京都墨田区亀沢２丁目７番２号　東京都墨田区 すみだ北斎美術館について視察 ３.同日　午後１時３０分～３時００分 〇東京都台東区東上野４丁目５番６号　東京都台東区 リノベーション型まちづくり及び略式代執行について視察 ４.令和５年８月２６日（土）　午前１０時～１１時３０分 〇東京都豊島区南長崎３－９－２２　東京都豊島区 豊島区立トキワ荘マンガミュージアムについて
３　視察等議員	委員長　岡空　研二 副委員長　吉井　巧 委　員　松本　晶彦、米村　一三、森岡　俊夫、田口　俊介
４　総経費	合計（６名）　402,400円　（一人当たり　67,066円） ※一人当たり経費に端数が出る場合は円未満切り捨て
５　所見等	別紙（６枚）のとおり

１．移行型の入所施設（通過型支援施設からグループホームなどへ移行）について
【説明者】社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会　杉並育成園すだちの里すぎなみ
施設長　小林　哲　氏
支援係長　　新居　慶太　氏

≪施設建設の背景≫
「すだちの里すぎなみ」は、杉並区内において「地域移行型の入所施設」を作りたいとの切なる思いから区と法人の協働により、区有地活用型の障がい者支援施設（当初は入所支援施設）として、2006年4月に開所。
当時、地域住民からの強い反対があり、区と事業所で近隣地域へと説明を尽くしたため、当初の予定より1年半遅れての開所であったとのこと。また、開所から10年間、地域住民へ施設の活動説明の場として、地域運営協議会の開催を重ねたことで、地域の理解も深まり、今では施設のお祭りに多くの地域住民が協力・参加し、開催できるようになった。

≪施設の概要≫
施設の入所対象者は18歳以上の知的及び精神障がい者で比較的重度者が中心。施設は3階建てで、各階にある居室スペースは４～７部屋を１つのユニットとし、それぞれ共有スペース、トイレ、浴室を配置した「グループホーム」的な造りとなっている。
これは、施設の目的である、将来の「地域移行」を見据え、主に退所後の移行先であるグループホームでの生活への訓練にもなっている。
施設の定員は50名（男性30名、女性20名）で、現在は20代から70代までの方が入所中。施設への入所期間は概ね3年間程度とし、施設内での就労移行支援、生活訓練、生活介護、選択活動や、施設外への通所訓練などを通じ、地域生活へと移行していく。
開所からの退所者は約１００名。その内、8割の方は地域のグループホームへ移行され、中には一人暮らしを選択された方もいるとのこと。

≪行政からの支援≫
行政からの支援としては、区有地の提供、施設建設にあたっての補助金、地域住民説明会の開催の他、地域移行後の生活を見据え、杉並区所管の入所利用に対し移動支援の支給（すだち５時間、自宅５時間）や、６５歳になったとき、施設入所していても介護認定を受けることができるようにし、スムーズな高齢施設への移行などもできるよう、選択肢の幅を広げることなどがある。

≪運営にあたっての課題≫
現状は、福祉人材の確保に苦慮している。地域移行型施設の大きな業務として、地域グループホームとの関係構築、他法人や行政機関との連携、地域移行の的確なアセスメント、グループホーム見学・宿泊体験における特別な取り組みなど多岐にわたる業務があり、スキルが求められることも、単なる人材難だけではない課題。

地域移行支援を想定した人員の確保ができていないと捉えることができる。
　また、地域移行時には入退所に伴う空白期間などで、1ヶ月ほど利用者不在期間ができてしまう状況があり、月初だと、サービス費の減となり、運営面に大きく影響することから、地域移行を進めながらも綿密な計画性が求められる。

≪所感≫
　今回視察した「すだちの里すぎなみ」は、障がい者の「終の棲家」ではなく、「地域移行」を支援することを目的とした施設で、居室エリアをはじめ、施設内での様々な支援や訓練、活動を通して入所者の地域移行をスムーズに行う工夫がなされていると感じた。本市でも、育成会の皆さんとの意見交換の中で、「親亡き後」の当事者の生活に対する不安が最大の課題となっているが、このことを尋ねた際、新居氏からは
「親御さんが元気なうちに『親亡き後』どうしていくか事前に相談し、将来のライフスタイルを想定した計画を立てていく」ことや「『親亡き後』の生活は誰が支えていくのか、今、何事もない状況から多くの支援者を作ることが大切」との指摘をいただいた。
　本市において、このような施設を作ることは難しいとは思うが、今ある地域資源を活かして「自宅」から「地域移行」へと段階を踏める支援の在り方について模索していく必要を感じた。

２.「すみだ北斎美術館」の運営費等の資金調達について
【説明者】　墨田区地域力支援部　文化芸術振興課　主査　吉田　英宣氏

≪美術館建設の経緯≫
　江戸時代後期に活躍した浮世絵師葛飾北斎は世界的に高く評価されている。北斎は墨田区亀沢で生誕し、９０余年の生涯の大半を墨田区で過ごした。偉大なる北斎を顕彰するため、平成元年頃には美術館建設計画が立てられ、予定地の土地購入まで進められたが、財政難でいったん凍結された。平成１８年に東京スカイツリーの建設が業平・墨田区内の押上地区に決定したことから、美術館建設計が復活した。

≪美術館の規模、開館後の状況≫
　鉄筋コンクリート地上４階・地下１階建てで、延べ床面積３，３００平米の美術館は平成２８年に開館し、総工費は約３４億円とのこと。
　開館した美術館には開館後の半年に年間来館予定者数２０万人を超える来館者があり、大きな反響があった。令和５年６月には累計１００万人を超える来館者を迎えている。
　大きな特徴は、葛飾北斎がヨーロッパで高く評価されていたことから、外国人の来館者が大半を超えるとの説明があった。ちなみに入館料は４００円とリーズナブルであり、年間パスポートは３０００円とされている。

≪独特の資金調達について≫

建設を決定した当初に多額の予算が必要なことから区民からは厳しい意見があったことから、当時の首長は、寄付金を多く集めて運営に当ると明言して建設した経緯があることから、ふるさと納税を大いに活用している。

墨田区には３つの応援プロジェクトがあり、そのうちの１つに「墨田区北斎ふるさと納税」がある。「墨田区北斎ふるさと納税」プロジェクトでは、令和４年度の納税額は９億７千万円の実績があり、累計寄付総額は３２億円にも上り、建設総額とほぼ同じ金額となっている。

集まった寄付金の使途は、美術館の管理運営・美術館の収蔵品の収集に充てられるほか、アート推進事業にも充てることが議論されている。

墨田区の他の応援プロジェクトとして、ふるさと納税によるクラウドファンディングを活用した「すみだの夢応援助成事業」、区民による区民のための応援基金である「すみだの力応援助成事業」のプロジェクトを展開している。墨田区では現在７つのふるさと納税サイトを活用して寄附募集を実施している。

ふるさと納税で多くの寄付額がある墨田区にはモノづくりの企業が小さい規模ながら約３，０００社あり、他の地区にはない製品が多数あり、それらを返礼品として取り上げている特色がある。その内の１つを紹介すると、㈱ヒロカワ製靴のスコッチグレイン「インペリアル・フランス」の紳士靴（推定価格１３０，０００円程度）がある。これは寄付額３６７，０００円の返礼品として提供されているが、この１品目で年間に約３億円の寄付を集めるとのこと。

今後の課題として墨田区の魅力を広めるために、以下の３点を掲げている。

〇今ある返礼品をもっと知ってもらう
〇新しい返礼品（モノ）をふやす
〇新しい返礼品（コト）をふやす

≪視察を終えて≫

現在、境港市では水木しげる記念館の建て替え工事が進展している。記念館の入館者数から推測すれば、「水木しげる先生」の魅力は葛飾北斎に決して劣るものではなく、むしろ幅広い年代の人たちに支持されていると考える。

本市のふるさと納税の直近の実績は約４億円であり、特色ある新たな返礼品の開発はもちろんのこと、水木ワールドの魅力を活用した返礼品の開発を進めることが肝要ではないかと考察する。

３．リノベーション型まちづくり及び略式代執行について視察

【説明者】　都市づくり部地域整備第二課　井上課長、戸越係長
　　都市づくり部建築課　松崎課長、越川係長
　　都市づくり部建築課　風間係長

「台東区北部地域におけるリノベーション型まちづくり事業」

≪目的≫

〇空き家・空き店舗等を活用するリノベーションの手法を用いて、地域産業であ

る皮革等の産業や商店街を活性化し飲食店をはじめとした生活利便施設の誘導を図っていく。

〇歴史・文化といった地域特性を活かしながら、都市計画マスタープランにおける北部地域（山谷地区等）の将来像「人々が共生し、住み働き続けられる便利なまち」を目指していく。

≪北部地域の現状と事業推進の背景≫

昔より、簡易宿所の集積と戦後の労働需要で発展・賑わいを見せていた北部地域が産業構造の変化により、空き家・空き店舗が増加し、まちの活力が低下したことを背景に地域全体をリノベーション型まちづくりのチャンスと捉え、利活用可能な不動産が多数存在していることから、新しい住民の流入を期待して事業を推進している。

≪これまで実施してきた主な取組≫

〇リノベーション型まちづくり事業は、空き家・空き店舗を活用するため、勉強会「まちセッション」を開き、まちづくりに興味のある人材の発掘や、新規事業のきっかけづくりの場を設けることで、活用可能な物件と事業者とのマッチングを行うなどのリノベーションに向けた技術的支援を行っている。

〇情報発信として、地域密着型メディア「タイトーキタリズム」を計５回発行し、情報発信スペース「フリーコーヒー」を運営する等不動産所有者と事業者とのマッチングや勉強会「まちセッション」を開催するなど、住民参加型まちづくりを実践している。

≪リノベーション型まちづくりのスケジュール≫

令和３年度・・・・勉強会や講演会を通じての機運の醸成や体制づくり。

令和４年度から・・事業検討やマッチングにより、リノベーション物件の事業化を進め、地域全体のまちづくりへ発展させている。

≪今後の課題≫

不動産オーナーと事業者・そして地域住民の理解や協力で将来地域で自走化していけるような体制づくりの構築が課題となっている。

「台東区における老朽空き家対策（略式代執行）」

≪空家特措法に基づく特定空家の代執行≫

〇学識経験者や警察・消防等の職員により構成される「台東区空家等対策審議会」を諮問機関として設置。

〇空家等対策における略式代執行は、空家の中でも、保安上の危険や衛生上有害であったり、周辺の生活環境に不適切な物件で、住民票情報などの公的な情報でも、所有者やその行方がわからない時に、やむを得ず行う措置で、平成30年1月未登記物件で、老朽化して倒壊寸前の傾斜した建物について、衛生上有害な点や火災など防災面での危険を考慮し、代執行した。

○台東区で平成30年に実施した際は、住民からの通報に基づく情報を把握・調査着手から6年の月日をかけて行った。

≪今後の老朽空家対策≫

区内残行の空家状況をしっかりと調査・継続することが絶対必要で、危険な空家を抑制し、安全なまちづくりを実現していく。

ですが、本市の特定危険空家対策にとても参考になる視察であった。

≪まとめ≫

台東区では、平成25年には823件の空家があったが、対策の効果もあり令和4年には199件まで減った。(地価高騰などの要因で不動産取引が順調に行われた結果であって、本市においてこのような状況は困難であると思われる。）が、法的な手続きの流れや調査の継続性の効果など本市における空家対策を講じるにあたってとても参考になる視察内容であった。代執行はあくまで最終手段であり、そうなる前にリノベーションや様々な手法で空家対策を考えなくてはなりません。

Ｉ．豊島区立トキワ荘マンガミュージアムについて

【説明者】　豊島区文化商工部マンガ・アニメ活用担当課長　熊谷　崇之　氏
　　豊島区文化商工部文化観光課課長補佐　　野上　正人　氏

≪トキワ荘≫

53～62年の10年間に「トキワ荘」で暮らした漫画家は、手塚、藤本、安孫子、石ノ森、赤塚各氏のほか、水野英子さん、寺田ヒロオさん、鈴木伸一さん、森安なおやさん、よこたとくおさん、山内ジョージさんらのべ11人。このほか、つのだじろうさん、園山俊二さんらのように、住人ではなかったが「トキワ荘」に足しげく通い、漫画家同士で親しく交流していた若手も多くいた。「トキワ荘」は若手漫画家たちが結成したグループ「新漫画党」の活動拠点にもなった。昭和57年老朽化のため、解体。

平成１１年、(仮称）トキワ荘記念館建設、４０００人を超える方の署名による陳情があり。

平成２０年、トキワ荘記念碑設置実行委員会が発足。

記念碑「トキワ荘のヒーローたち」平成21年設置。

平成２３年トキワ荘通り協働プロジェット協議会が発足。

漫画家を目指す若者を支援。2,016年より夢の虹イベントを毎年開催。

トキワ荘再現に向けた検討を重ね、令和2年7月7日にトキワ荘の再現施設として、トキワ荘マンガミュージアムが開館した。装整備費は9.7億円、寄付金は4.7億円（7月末時点)。寄付金は全額を充てるのではなく、運営や維持管理に充てられているとのこと。ミュージアム前には寄付された方や会社の名前を記入した記念ボードが設置され、ふるさと納税で返礼品なしで寄付された方々との説明を受けた。記名された中にはマンガ家や著名人も多く寄付されていた。

昭和20年から30年代のマンガ家たちの生活がリアルに再現され、その生活が垣間

見ることができた。
　当日は、昭和のマンガ家に憧れ、マンガ家となった作家のあずまきよひこ先生の作品展「よつばと！」原画展の特別企画展が開催されており、この日も愛好家が訪れていた。

≪トキワ荘を主軸に取り組むまちづくり≫
「マンガの聖地としま」として南長崎の街の活性化を目指している。ゆかりの場所にモニュメントを設置したり、市民のアイデアで周辺グルメマップも作成されていた。マンガ家の皆さんが出前をとられていた食堂「松葉」も現存し、人気スポットとなっていた。
　ゆっくりと見学できるように予約制であったり、街を散策する取組も意図されていると感じた。コロナ禍の中、開館し入館数も増加の傾向となっているとのこと。懸念事項としては、かつて賑わいのあった商店街に賑わいが戻るよう、そこに暮らす住民の助けになる取組が必要とのことであった。